

私は現在、武道具店を経営しながら、週に平均3回ほど稽古をしています。仕事を持っていて一般の愛好家の皆さんにとっては、週に2回、あるいは1回でできればいいほうかもしれません。実際、私が会長をしている武蔵村山市剣道連盟の会員の多くもそんな社会人がほとんどです。私自身の修業も合わせ、どうしたらそんな彼らを強くできるか、常日頃から考えています。

次回からは技術的なことにも言及していきますが、今回はその前に、気持ちの持ち方、取り組み方についてお話をします。むしろそういうことのほうが、自分を変えられる要素は大きいのではないのでしょうか。

社会人のための

剣道講座

これができれば萬歳萬歳萬々歳

第1回

社会人剣士よ

正しい剣道を目指そう

「いい剣道」を目指せば
段は後からついてくる

私は正しい剣道をするということを中心に置いて稽古してきました。試合になるとつい、自分は打たれないで相手を打とうとがちです。ところが、それでいながら打たれるとカリカリする。だからいつまで経っても直らない。1年前と同じことを注意されていたりする。

私のところに所属しているある方は、高校時代にインターハイにも出たことのある方です。その方もやはり当てることばかり考えた剣道でした。そこで私は言いました。

「そんなことはやりやっていたら剣道が

波多野登志夫

教士八段

(はたのとしお) 昭和20年1月1日、東京都武蔵村山市生まれ。国士館高校、日本大学卒業。大学卒業後、会社員勤務を経て、昭和46年に南武堂剣道具店を設立する。現在同店代表取締役。平成6年、49歳のときに剣道八段合格(2度目の受審)。西東京剣道連盟参与、駿河台大学剣道部師範、武蔵村山市剣道連盟会長、金籠館道場師範

写真 ● 樽川智亜希

高年齢剣士と日々剣を交えている波多野登志夫大教士が、愛好家が目指すべき剣道と、その剣道への到達するためのヒントを語ります。





稽古をすることは大事なこと。

しかし、稽古に対する気持ちの持ち方を

少し変えてみましょう

社会人のレギュラーになろう

八段を受ける方は、先祖の墓参りくらいしてから受審してほしいと思います。私も、審査の5カ月前からいろいろ準備を積み重ねました。そして京都へ出発する日、朝5時に墓参りをして「今日審査に行つて来るよ」と報告しました。それで「やるべきことは全部やった」と心おきなく、京都へ向かったのです。そういう心の準備こそ、審査に際して大切なことだと思います。

郷里にお墓のある方も当然いらつしやると思いますが、そういう方は朝行くわけにはいきませんので、受審日が近い日に郷里へ帰った際、墓参りすればいいと思います。「剣道は礼に始まり礼に終わる」と言いながら、自分の先祖に線香ひとつもあげないのでは「本当にそういうことをやっていると言えますか」と言いたくありません。

稽古への臨み方も考える必要があります。私は群馬県の旧勢多支部の皆様と20年以上のお付き合いを続けています。いまは他の市にそれぞれの町が合併されたために勢多支部はありませんが、いまでも旧勢多支部として1年に2度ほど稽古をしています。いまや六段と七段が40人ほどの地域ですが、椎茸農家をしていったり4万羽の養鶏農家や養豚業をしながら熱心に稽古をされている。本当に頭の下がる思いです。

ある年、その会長が、六段を受審する二人を連れて武蔵村山の稽古に来ました。さて、稽古が始まりますと、そのうちの一人が元立って稽古を始められた。彼の段位は周りには言っていないので、うちの会員が次々と並ぶ。なかには六段の人もいました。

疑問を覚えました。なぜ剣道を習いに来ている者が元立ってしまうのか。「今あなたが稽古している相手は六段ですよ。よそから来てそういう非常識なこ

ダメになってしまふよ。とにかくまっすぐ打つことをやりなさい。高校時代にインターハイに出ているんでしょ。気持ち高校時代の気持ちで、そして正しいことをすればいいんですから」

それからまっすぐ打ってきたんです。だからみんなの前でほめました。

「よく勇気を振りしぼってやってくれた。打たれても打たれても、そういうふうに取り組んでいれば、1年ぐらいうると『剣道が変わってきたよね』と評価を受けるようになりますよ」

実際には、なかなかこれできません。

打たれるのが嫌だからです。それがクセになっていたらとすれば、直すのはよっぽど大変です。

まだ七段だった頃「そんなことしていいと八段には受からないよ」と言われたことがあります。その言葉は好きではなかった。段のために剣道してるわけじゃないから。私の場合は「いい剣道」をつねに目指したつもりです。ただ、その結果八段になった、というのが一番いいのではないのでしょうか。いい剣道を目指せば結果として、六段にも七段にもなれるということだと、私は思っています。

とをしないでください」

と言つてすぐに稽古をやめさせました。後日の昇段審査で、その方は六段に合格しました。その祝賀会に、私も呼ばれましたので出席し、挨拶を求められましたので、こう言いました。

「その努力には敬意を表するけれども、ひとこと言いたい。剣道を習いに来たのが教えに来たのか、そういうことをする人が合格しても私はおめでとうと言いたくはない。連れてきた先生が恥をかくじゃないですか。なぜそういうことが分からないのか。そしてなぜ周りが注意をしないのか。それでは剣道をしている意味がありません。全剣連は合格としましたが、私は六段として認めません。こういう方が六段になったことは剣道界には、マイナスだと思います」

その場には八段の先生もいましたので、その八段の方にも言いました。「仲間じゃだめだ。八段になつても、言うべきことは言いなさい。嫌われてでも言わないと、剣道界全体がダメになってしまうよ」

後日彼から手紙が来ました。私は一厳しいことを言つたけれども今後の人生にとってプラスになると思うので、頭に入れておいてください」と返事をしました。私が師範を務めている駿河台大学の学生には、つねに「社会人のレギュラーになれ」と言っています。結婚したら、夫婦としてレギュラーになろう、つまり、互いに信頼されるような存在になろう、ということですよ。「あなたは必要ない」と会社で言われぬように。そのためには

学生時代に一生懸命レギュラーを目指さなければいけません。なろうがなるまいが、汗水を流す。選手に選ばれなかったら、仲間のために一生懸命応援する。それが、社会に出たときに周りから信頼される元になると思うのです。

新入社員になつたら1年間、とにかく一番に会社に行きなさい、とも言います。会社というのは不思議なもので、役員クラスの人ほど出社が早いです。そうすると、仕事ができるかは別にして「こいつ

はやる気がある」と上の人間は思います。私も一部上場企業に勤めていた頃、30分ほど早く行つてましたら「波多野君、いつも早いね」と役員の方から声をかけられました。たいした勤務はしていませんがそれでも評定はA。人生なんてそんなものだと思います(笑)。

最後に、私が約30年前から書き続けてきた川柳を毎号ご紹介します。自分を奮い立たせるため、書きためてきたものです。

武蔵村山市剣道連盟の稽古は、月曜日と金曜日の週2回。そのうちの1回は、少年部の稽古にも参加し、稽古後、訓話を行なう。この日は、連盟旗の解説だった



わずかな差

気づかなければ

天地の差